

# おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

平成29(2017)年  
**9月号**  
通巻565号  
毎月23日発行  
(題字 矢追日聖)

★発行日 平成29年9月23日  
★発行所 大倭出版局  
〒631-0042 奈良市大倭町1の12  
☎(0742)44-0015  
★印刷 大倭印刷 監修  
★定価 1部 250円  
年間購読料3,000円(送料共)  
★郵便振替 01050-6-67002  
大倭出版局  
URL <http://www.ohyamato.jp>



太郎坊・阿賀神社 (滋賀県東近江市の太郎坊山と阿賀神社入り口)

屋久島 手塚賢至さん撮影 (文・5頁)

昭和57(1982)年9月2日 東光大祭法話より

## 心の通じる先祖祀りとは

法主 矢追日聖 (満71歳)

### 大倭の活動の拠点

どなたもおはようございます。今年もまた夏が訪れてまいりました。今日も朝の間はかなり涼しゅうございましたけれども、お昼になるとやはり夏らしくムシムシと暑くなってきました。

この旧七月十五日に行っております大倭の東光祭については、もう皆さん方よく分かって下さっていることだろうと思います。昭和二十一年の旧七月十五日を始めて、これで三十七年目に当たります。三十七年目というとかいかわくがあるような感じでございますけれどもね。

私がこの山にまだ入っていない時代のことです。その時に東の方の空から奇瑞というような光が出たんですね。もちろんこれは自然現象でございます。どなたでも見えただろうと思うんです。

ちょうど夕方、満月が東の山際から出てくる時間で、そして太陽が生駒の西の方に沈んで暁のような明るい空でございました。

常識で考えますと、太陽が西に沈んでおるんやから西の方から何か出てくるんだつたら分かるんですけども、逆に東の側から西に向けて放射状に、ちょうど虹のように七色の大きな光のようなものが、八の字のようにこっち向いて出てきたわけです。太陽は西にあるのに、逆の方からそんな光が出てくる。私も奇跡のような現象だと一応は思いました。

その時に私の歳なんぼやったかな、数え年の三十五、六位やったと思うんです。どうも不思議やなあ、これは何のことかなあと、私はブーツと空を眺めておったんです。

その時にちょうど虚空からというか、別に誰かが言うてるようなそんな人の声じゃないんです、自分の頭の中に「黎明は訪れたり、東方の光」「大法は立てり、大倭太加天腹」と聞こえてくるんやね。大きな穴の中での言うてるような、ポアンポアンとした響きがある感じやねんな。そして現在のこの場所を拠点として、戦後の新しい宗教として活動せよというような霊示があったんです。それが昭和二十一年ですので、街頭布教とかは行ってましたけれど、まだこの山に入ってたなかった。

それで私はこの場所が、大倭の宗教の拠点になるんだなあという自覚を得たので、昭和二十二年の十月に、この山の中に住居を移して、ここを大倭教の本拠として色々な活動を始めたんです。東光祭には、そんないわれがあるんですね。

それで本当を言えば、十五夜の満月のお月さんが出て、お日イさんが生駒の山に沈む、ちょうどその時間が、東光祭のお祭りをする時間でございます。第一回の昭和二十二年の東光祭は、日の暮れにその鏡池の下の畑の中で祭典をやったと思います。その次の年は、確か鏡池の堤防の上でちょうどお月さんが出てくる時に祭典をしたと思うんです。もう次の年ぐらいいしたかね、この鏡池の向こう側の今、教旗がたつておるあその所(※西齋庭)で、お祀りをしたような記憶があるんです。まあその当時は別にうちの家族だけのことでしたから、その辺でお祭りできました。

けれども年々ぼつぼつと、何かしらんけども大倭を宗教的に信仰して集まって来る人が増えてま

いりまして、今日にこうして至つておるんです。それで昭和二十七年に、集まってくる人達がお互いに金を出し合つて、現在ここにありませす拝所(※旧拜殿、4ページに写真)を初めて造つてくれたんです。

## 人格霊達と共に仕事をす

お寺であれば金堂というような場所ですけれども、ご覧の通りの建物が、昭和二十七年から今日まで続いております大倭の祭典行事の宗教的殿堂として、これがまた一つの誇りでございます。

普通、世間一般の人達は、まず建物が立派で、それから信者の数が沢山あれば「あの宗教は、けっこうな宗教や」という考え方だと思ふんです。けれども、大倭にはそういうような、ただ表向きばかり考える神さんは一人もございません。

私は人間の世界において仕事をしておりますけれども、私には目には見えない人格霊の取り巻きがおるんです。死んでしまった過去の人達ですが、肉体は無くなつても霊魂は残っております。それを人格霊と言っているんですね。

一旦肉体をさげて人間に生まれてきた人達ですが、肉体が無くなつて霊魂だけ残っている。人格霊ですけれども、それを神さん扱いにして人格神と言ふこともあります。

雨を司つたり、雷が鳴つたり、こういうような自然の摂理、自然の力、エネルギーを神さんと称しておる場合、自然神と言っているんです。

だから神さんの種類には、そういうように自然神と人格神と二つがあるんです。

で、その人格霊が、幸か不幸か分からんけれども、私個人のおるりに取り巻いております。過去において宗教的な、あるいは精神的な、あ

いは文化的な仕事を色々して、そして自分の一生を終わつて死んだ霊魂が数知れずございます。だから大倭教として立つ時に、正義派と言いますかね、過去において真面目に仕事してきた人の御霊(霊魂)が、本当の正しい宗教でやってほしいというような希望を持つて集まつて来ておるんです。

今、私がこうしておつても何万というそうした人格霊(人格神)が取り巻いて、私と共に仕事してくれておりますから、恵まれた生まれつきだと思つて喜んでおるんです。

世間では、えらい殿堂やお堂を建てて何百万人の信者をこしらえて、それが宗教の成功のように言いますけれども、大倭は絶対、建物を中心に考へたり、信者を沢山増やそうとかいう野心を持つて宗教活動をしてはならないと、私を取り巻く人格霊から強く戒められております。

もし私が信者を獲得するような野心を持つて、言い換えますと組織を作つて、熱心な人には位を付け格式を付けて信者を集めさせて、そこから金を集めて、大きなお堂でも建てるような形式をとつた時には、私は命が無いと言われております。そんなことをしなかつたので現在もこうして達者でいけるんだけれどもね。終戦の時から今日まで、私は同じ気持ちでやつてきてるんです。

それでも私にも、やっぱり神さんから叱られる場合があるんですよ。また叱られたことが結局ひっくり返すと神様のお慈悲だったというような、両方引つ掛けたような叱られ方、いわゆるバチの当たり方も、今日まで何回か受けております。

私の人間根性だけで物事をやつた場合、だめです。いつも、色んな人格霊達の意見とか心というものを受け取つて、それを境界に行つていくというのが、私のお役目なんです。

## ツクツクホウシも拝んでくれている

そういうような意味で今日は東光祭で、旧七月十五日で、大倭に縁のある皆さんが来ておられます。来られる人だけでいい、無理して来る必要は無いんです。来られる人達がこうして来て、先祖さん達も共に今日のお祭りには参画しておられます。

その先祖さんと申しますのも、人間一人一人の血の繋がりをずーっとさかのぼっていくと何億という先祖さんがおるんです。何々家の先祖代々と言いますと、人類始まって以来その辺までさかのぼっていくんですから、もう無限大なもんです。今日の祭典と同時に、先祖さんのいわゆる回向くわう供養、祖霊祭を行っておるといふのも、先祖さんを喜ばすことによって子孫の皆さんが幸せに暮らしていける、そういう因果関係があるからなんです。先祖さんが苦しんでおるとか、子孫に対して不平不満があるとか、そういうような家は何をやってても都合良くはいきません。仮に商売をしても失敗する、あるいは人から損かけられたり、次から次と病気になるったり、交通事故だとか色んなことがやっばりおこります。

先祖さんを大事にするといつてもね、心が通じるようなお祀りをしなければいけないんです。ただ形式的に仏壇で祀って、お線香あげて、お茶でも供えておいて、坊さんに拜んでもらうたらそれでもいいというような、そんな先祖祀りは喜びません。それよりも子孫の者が先祖さんと同じ心で交流するのがいいんです。

それには、例え自分達の日々の食事の物でも何でもよろしい、仏壇でも、場所はどこでもよろしい、日々幸せに暮らさせてもらってありがとうという感謝の祈りを込めてお供えした時に、それは

先祖さんに通じます。

お坊さんに拜んでもろても、心が無かったら先祖さん喜ぶわけじゃないんです。そんなこと言うたら坊さんに叱られるけれども、現代では坊さんが年忌とか建夜で拜むのも商売みたいやもの、あんた達が先祖さんを思う心では全然違うんです。お布施の多少でお経を長くあげてくれたり早く仕舞いにしたり、私の知ってる範囲ではそんな坊さん多いです、皆とは言いませんけれどね。だからそれよりも家族の者が一生懸命にお仕える、真心からお祈りする、これが先祖さんが一番喜ぶことであろうと思うんです。

今日は大倭の奥の齋庭で皆さん方の先祖さんのお祀りを致しました。毎年、お堂の中でするんじやなくして、齋庭で土の上に座って、一人一人の、仏教の言葉で言えば回向供養をしております。

お寺であれば金箔貼った立派なお堂の中で綺麗な仏さんを前に飾って、赤やとか紫の衣を着た坊さんがずらっと並んでお経あげてくれたら、形はありがたいなあと思うかもしれません。

けれども大倭の場合は、私を取り巻いておる人格神達がそんなことは止めよと言われるんです。だから土の上に座って、上は何もない青天井です。お堂も何も無い、金びかも何も無い。その替わりに杜さんのように青い葉がぐるりにちゃんと繁って、幸い今日はお天気でもあるし、全然日も当たらなかつたし涼しかったです。

お経あげたり念仏唱えたりしなくても、もう秋を迎える蟬ですけれども、その蟬の声が止むこと無し、今も鳴いております。まさに蟬時雨と言う通りなんです。あっちもこっちも一斉に「ツクツクホウシ、ツクツクホウシ」と拝んでくれているんです。一人一人先祖さんを皆呼び出して供養している最中に「ツクツクホウシ、ツクツクホウシ」

と、もう蟬の声が山の中に遍満してるんです。本当にまあこのくらいありがたいことはないなど、私は非常に嬉しく思いながら祖霊祭を行ってましたんでございます。

## 皆、持って生まれた使命がある

で、私もだいぶ歳いきましてね、今年で（誕生日がくると）もう七十二歳になります。まあだんだん先が短うちひなつてまいりますけれども、気持ちだけはまだなかなか、精神的には若さを持つております。

やっばり人間には一人一人生まれて来た時の使命というものが、これが皆お互いにあるんです。仏教では一大事の因縁という言葉で説明してくれています。

だから歳なんか考えることがおかしいや。自分の仕事が終わった時には影を消していく、これは自然の摂理でございます。だから私がまだ元気でこうしておられるというのも、まだまだ仕事が残っておるんやなあ。

昭和五十五年、今から三年前には私も世間の人達と同じように頭を患いました、二、三日でしたけれども左半身が不随になりました。もうすぐ治りましたけれども、医者のお言葉を借りると、一過性の脳血栓だったらしい。それで病院で四十日ほどお世話にもなりました。

福祉施設の安宿苑の改築をやってる最中で、やはり五億近いお金も要ったことですから、人間として金集めをしなければいけない。金が無かったら仕事はできないし、私がそんな金のことでおどるといふか、生まれて初めて金することに神経使ったんです。結局、これがまた将来において皆さん方の幸せになる一つのきっかけになればけっこう

▼祖霊祭の経木書きをしてくれた方のお名前を記録しておこうと思いました。私の知る範囲で旧拝殿の頃は故澤口志なさん・故森下新蔵さん。その後は故内海幸三さんや川竹四郎さん、矢追房子で、且田容子さんもお手伝い下さっています。



前に立つ法主様は、間もなく満77歳になられる頃です。



▼昭和63年当時の旧拝殿です。拝殿竣工(平成元年)の少し前、今は教務本庁が建っています。

いぼれずみ

矢追 房子

だし、一病息災と昔の人は申しますからね、なおさらありがたいと思っています。今日は、暑い日でございますけれども、これだけ沢山の方にお参り頂き、その点において非常にありがたいと思います。どうか夕方までゆっくり大倭で先祖さんと共に遊んで頂きたいことをお願いしまして、今日の感想を交えたお話としてこの辺で終わらせていただきます。皆さん方、どうもありがとうございました。(文責・編集部)

平成29年度大倭会文化講演会

(協賛 交流の家・NPO法人むすびの家)

# ハンセン病の真実を追い続けて

—35年以上にわたる報道カメラマンとしての取材から—

日時：平成29年11月11日(土)午後2時～  
 場所：大倭拝殿 **入場無料**  
 講師：宮崎 賢(みやざき けん)氏



講師プロフィール

- テレビ報道カメラマン。1953年岡山県生まれ。35年以上にわたり、長島愛生園・邑久光明園をはじめ全国13か所中、10か所の国立ハンセン病療養所のほか、ライ菌の発見者であるハンセン医師の生まれたノルウェーや、またインド等、世界のハンセン病政策や現状も取材。
- これまでにハンセン病ドキュメンタリー12番組、ニュース特集120本の撮影・編集。第54回ギャラクシー賞奨励賞、第43回放送文化基金賞・放送文化個人賞をはじめとして、いくつもの放送賞を受賞している。
- 当日は講演の中で宮崎氏の作品を上映します。  
 (講演会終了後、講師を囲んでの懇親会を行います。懇親会会費：夕食付1500円)

2017年7月15日東京新聞「この人欄」より

「同じ人間として、望まない人生を送らされた不条理を伝えねば」。ハンセン病問題を追い続け、放送文化基金賞を受賞した。

1982年夏、瀬戸内海の島の療養所をはじめて訪れた。本土への架橋を目指す入所者の取材だった。同僚でも「汚い病気」と偏見を隠さない時代。最初は足がすくんだが、「島流しを一日も早く終わらせてほしい」との叫びが胸に突き刺さった。2か月後に再訪。交渉の末、入所者1300人のうち数人が撮影に応じたが、顔を出したのは一人だけ。大々的に建設が進む瀬戸大橋と対比したドキュメンタリーにまとめた。(後略)

足あと  
足あと

2011年の出会い  
2011年、からだごとく、

天狗さんへ1

鹿児島県熊毛郡屋久島町 手塚 賢 至

天狗さんのことを書くことになった。

今では「天狗」にさんをつけるのは私なりの親しみと感謝の意味を込めてそのように呼ぶようになったのだが、それらの経緯をこれから綴ろうとすると胸に何かゆかしいざざ波が起きるような心地がする。

今回『おおやまと』編集部からやんわりと原稿依頼を受けて、逡巡しながらもお引き受けした。

ここに記す事柄は私自身の身の上起きた極めて個人的な出来事で、この著しく稀な(と思われ)一連の出来事と展開は果たして一般化できるのか、それより我が身に起きて、そして今に至るまでのもろもろの事柄を私自身がどれほど理解し納得の上で一筆書けるのかはなほだ自信がないことと、私的ゆえの恥じらいが逡巡の理由である。書けるか書けぬか迷いつつも振り払う想いで出て立ったのは『おおやまと』紙上という安心感に重ねて、少なからず大倭とのご縁も見えざる糸の織りなしのごとく感じられ、いささか唐突な天狗というテーマを、この場に及んで明確な形を示しえずとも、寛容な当紙の読み手の皆さんなら許して下さいらうという甘えがあったことである。

\*

2011年は忘れ難い年、3月の東日本大震災と福島第一原発事故は今なお記憶に、そして現実的にも生々しい爪痕を引きずる惨禍が引き起こされたあの年である。そして私自身にも大きな異変が起きた年、私には重症の自己免疫疾患の病気がして現れた。この二つは脈絡が無いように見えながら私の中では通底する何かがあつて分ちがた

いと事後に気付く。

特にあの原子炉の爆発する映像の衝撃は大きく、まるで雷に打たれたようなショックが襲った。広島、長崎を知り、さらにチェルノブイリ原発事故を経てもお根拠のない安全神話を振りかざし、遂にこのときを迎えてしまった恐怖と慚愧に震撼した。自分の無力さも感じ、インターネットを通して外国から届く放射能の拡散シミュレーション画像を観ながら、正確な情報の公開を拒む私達の国のあり方そのものにも怒りと虚無感が募り、嘆きと共に様々な涙のようなものが私の心身に重く沈殿した。

私自身の中に実際の異変が起きたのは5月末、しかし前年の暮れあたりから予兆はあった。それまで永年、屋久島の自然環境保全の活動に取り組んでいたが、次第に実力の許容以上の課題に手を広げ、心身がオーバーヒートして空回りが生じていたのだが、それを顧みる余裕もなく、周りの人との間に意識の相違や隙間が生じていた。いくつもの行政機関を含め多くの人とのかわり動いていながら、もとより人付き合いと組織が苦手なのに無理を押しつつ活動していたのだ。一途に自分の価値観にとらわれていると落とし穴がある。反発があり、事実を伴わない非難や反感、さらにはいわれのない中傷が私の周りに渦巻き、抗うことも出来ずに一人孤独のふちに立つて落ち込むことはなほだしかった。こうして心的に不安定な状態を抱えた中で発症したわけだ。

\*

まずは私の身に生じた「自己免疫疾患」と「血

栓性血小板減少性紫斑病」を簡略する。文字通り血管に血栓ができて、血液中の血小板が減少し紫斑ができる致死率の高い難病で、血漿交換治療が有効。血液は赤血球、白血球、血小板と様々な抗体などが含まれる血漿成分から成り、人の生命活動に不可欠なものだが、自己免疫機能も大切な働きの一つだ。私の場合、外敵から自己を守るために働く抗体が、自己を守るお互い仲間であるはずの別の抗体を攻撃してしまう「自己免疫不全」な状態に陥った。味方と敵の見境がなくなり自分自身を見失ってしまうのだから恐ろしい。

この病気の原因は医学的には解明されていない。患者に強いストレスがかかることで引き起こされるようだと言われ、医師も歯切れが悪い。「貴方にも何かストレスがありましたか」と問われ、私の中で起きたことが瞬時に納得できた。心的ストレスに苛まれながら私は自己否定までしていたから、その意識の波動に、それぞれの自己意識を持つ抗体たちがお互いにパニックを起こし、医学的に言う「自己免疫疾患」として発症したのだ。

心のありようが体に直結して病の種を宿してしまう。心と体は分かちがたく結ばれている。2011年の前半、私の心の中に私自身が生じた想念は、体の細胞レベルまで揺るがし大きくバランスを崩していたのだ。

\*

ますます体調が急降下のなか、義理や面子(メンツ)やらぬ責務感などからめとられて断り切れずに不調を隠して付き合った。5月、つらい体を引きずってある会合出席のため京都へ出かけた。限界を自覚し明日は病院へと決めて寝入ると翌朝いっせいに回復したものだから、旅先の入院を避けたく重い体を引きずりながら屋久島に帰ってきた。熱、だるさはさらに嵩じて、血尿は徐々に深刻

な色を帯びるに至り、苦しさが極限に達してやっと観念して妻の付き添いで病院へ赴いた。事態悪化の渦に引きずり込まれまともな判断も出来ず、心身萎えて活性の気力をすべて拒むかのような頑迷な私になりつつあった。

病院の待合室に着いたとたん意識が朦朧として遠のく。医師の問診にもろれつが回らない。血液検査の結果を見て医師の顔色が変わった。一刻を争うとして鹿児島市内の血液の専門病院への入院を決め、救急ヘリの要請も手間取るから、直近の飛行機にて飛び立つようにと指示された。機上からの鳥影をこれが見納めかと薄い意識の中でぼんやりと心細く眺めていた。

病院ではすぐに治療が開始され、二昼夜にわたる間断なき血漿交換の効果あって小康を得るが、この間家族や親戚、親しい友人が訪問してくれて自分が危篤状態であったことを知る。

普通はこれで回復し退院の道筋だが（ここで終わっては無論天狗さんとの出会いもない）、またもや急転して奈落する。再度血小板が減少して「難治性」という至極稀な症状に堕ちてしまった。情けなや、なんとという業の深さなんだろう。

＊

「この症状は当院では治療できません。鹿児島大学病院に転院します」。またしても緊急搬送でベッドごと大学病院へ急行する。車窓から見る景色もまたおぼろげでこの時はさすがにジ・エンドの覚悟も去来した。再度集まった家族を前にして、新しい主治医は、私の容体と治療方針を説明して、「世界中から難治性の症例をインターネットで調べてみたが唯一治る治療例(薬)がある。これに賭けるしかないが、副作用が強くリスクも高い。一刻の猶予もない状態だから同意していただければすぐに投与始めます」。保険適用外の高価な薬だ

が費用は病院が賄<sup>まかな</sup>ってくれるという。いわば献体実験の身の上だが最後の命綱に異存はない。私も車いすでうなだれながら消え入る意識で領<sup>うけ</sup>いた。

当時、血小板は基準値の二十分の一のどん底まで落ちて生存が不思議なほどの数値を示していた。薬の投与が始まった当初は変化が見られず医師も不安げであったが、日に日を重ねるに従い、血漿交換も合わせた治療の甲斐あって徐々に徐々に好転の兆しが見え始めていった。目に見えて数値は改善され、病理を解明し治療方法を見出した現代医学の鮮やかな勝利ともいえる。

＊

しかしその陰でさらに大きな見えざる力も働いていたのだ。私が天狗さんに出会うのは生死の境に漂っていたその頃である。私の容体を心配してくれる友人からの電話で、初めて私にかかわる天狗さんの存在を知る。

その友人は私の重態を知り遠路はるばる駆け付けてくれ、難治性治療の医師の説明にも立ち会ってくれた私の信頼する人である。友人は私の置かれている状態に関してある方に相談をした。その方は事に応じて異界を視るに長けておられ、この方とも私はいくらか親交があり信頼をもって接している。その方からの伝言として電話で伝えられたことは私の胸内に鋭く刻印された。

私自身に深い反省を促しながらこれからの生き方の指標とすべき励ましでもあった。すべてに心当たりのある指摘ばかり、私の陥った状況をまるです手に取るように把握されていて、これには真摯に受け止めざるを得ないと芯から感得した。

この時初めて「天狗さん」のことを知って驚いた。なんと生死の境を漂いうづくまる私のベッドの上に仁王立ちして、私に押し寄せる暗雲を懸命に払いのけてくれているのだという。暗雲は私自

身が作り出したものであり、また他者の強い信念なのかもしれない。ともかく私を助けようと尽力する天狗さんの姿を想像すると今でも感涙する。無論見えるはずもない。その因果も知れない。しかし私にはその力がありありと感じとり、受け止めることが出来る。

それまで深く知ることなかった存在の「天狗さん」がにわかには身近な感謝の対象となり、そしてどうしてもお礼参りを果たしたいと念願するようになった。

＊

二カ月あまりの鹿児島市滞在を終えて屋久島へ帰り、傷んだ体をゆつくりと整えながら「天狗さん」探索を『とおやまと』紙をよりどころにしてはじめた。

メッセージにあった太郎坊、次郎坊、の名を持つ天狗さんや大倭神宮に鎮座される鞍馬大魔王天狗さんについて調べていくと矢追日聖さんが書かれた「天狗さんあれこれ」に詳しく教えられる（1968年『大倭』掲載、『とおやまと』2016年10月号に再録）。それから林修三さんの「太郎坊、次郎坊を求めてへ上へ下へ」（2007年5、6月号掲載）は私が最も求めていた謎を解く羅針盤となった。ここで太郎坊、次郎坊そして大倭とが円環を描く。

琵琶湖を挟んで東側に太郎坊宮、西側に次郎坊宮が鎮座するという。太郎坊宮は2015年に念願の参拝を果たした。

次は次郎坊宮である。林さんの文章と地図を頼りにJR湖西線比良駅に降り立つ。高架のホームから西側の比良山地を望むと琵琶湖から一直線に伸びた道が山容に接するあたりにこんもりと神社の森の気配がある。そこで定めて高鳴る気持ちで次郎坊さんを求めて歩いていく。（つづく）

# 寸 莎

第126回

安本 雅一さん

## 武術の道を歩む

今回登場してもらうのは、その豪放な風貌と辛辣な物言い知られているFIWC関西委員会の異色のキヤンパーOB、安本雅一さんである。この数年体調を崩していると聞いていたので、大阪の長居運動公園の近くにある、自宅を兼ねた日本拳法の道場「融心館」を訪ねた。道場主でもある安本さんは、酷暑の日でもあったが、戸を開け放った応接室のソファに上半身裸の姿でどっしりと座って、興味深い話しを次々と語ってくれた。もう少し弱った姿を予想していたのだが、「二日おきに人工透析を受けているので、かえって元気になってきた」と口調は滑らかである。安本さんは昭和15年3月27日に大阪で生まれた。「祖父は長州奇兵隊の流れを汲む、日支事変にもかかわりを持つ大陸浪人のような人物だった」というから、安本さんには祖父の遺伝子が濃厚に伝わっているよう



だ。意外なことに、「小学校の時はじめられっ子で、教師にさえいじめられる。いじめられ大将」だったと笑う。そこで負けてばかりいないのが安本さんで、「町の柔道の道場に通い、住吉中学校の時には有段者になっていた」とねばり強い。

府立鳳高校でも柔道部に入ったが、「高校では番長を張っていて、いつも喧嘩が絶えなかった」と淡々と語るが、その頃の姿は充分想像できる。同時に早熟な高校生だったようで、「そんなに本は読む方ではなかったが、カントやキェルケゴールに魅かれたり、ブルタークの『英雄伝』にふれて、『英雄になりたい』という気分を抱いたりした」というから文武両道の型破りの若者であったようだ。

同志社大学文学部社会科学科に進学し、新聞学を専攻する。後に大倭一門に入門した柴地則之さんとは同級生で、二人とも事情があつて共に卒業試験に落第、卒業時期が遅れてしまったというエピソードがある。

当時は学生運動の高揚期で、安本さんは学内のカベ新聞に載っていた「小さな旗上げ」という記事に引きつけられて新左翼の学生運動に加わっていく。「運動にのめり込んでいき、京都社会学同総務という役割りまで引き受け、やがて内ゲバにもかわるようになってしまふ」と当時をふり返る。安本さんの武術の腕が役に立ったことは想像できるが、本人はあえて詳しくは語らない。

歌手の加藤登紀子さんとは学生運動の中で知り合い、その後も彼女の後援会の有力な一員になっていく。

武術については、法主様と二人で語り合ったことがあるという。「法主さんは『わしのは長身を活かして、下段の脇構えから刀をすり上げて面をとる軟剣の流儀』と説明してくれた」と話す。そして安本さんは、わざわざ真剣を取りに行つて抜刀し、目の前で実演してくれた。

韓国の古流の武術である「テコンド」の関係者から日本での普及を依頼されて、道場では大分以前からテコンドを主体とした修練を行つてい

る。安本さんの息子の一人は、重量級テコンドの3年連続の全日本チャンピオンだったことがある。

安本さんは武術だけでなく、幼稚園やアパートの経営もしており、悩みをかかえた若者たちの面倒見もよいと耳にしていた。若者へのかかわりについて尋ねると、「若い連中とはなるべく対等な立場で接するように心がけている」と少し照れながら答えてくれた。

最近、冒頭でふれた祖父のことだけでなく、ご自身のずっと以前からのルーツにも関心を抱くようになってきていて、「文献を調べていくと、堺の商人出身の茶道の祖である千利休が先祖の一人だったのでないか」という、かなり確実性の高い推理をするに至っているとのことだった。

10年ほど前から胃癌を患うようになって体調が思わしくなく、90キロあった体重も60キロくらいに減ってしまったという。しかし、ご本人はまだまだ意気軒高で、この記事のための写真を撮る際にも、「ちよっと待って」と小走りにもう一度日本刀を取りに行きカメラに向かってくれるサービス精神を示してくれた。

これからも体調を回復して独自の道を歩んでいただきたいと願いつつ道場を後にした。(聞き手 岸田哲)

# あじさい日記

8月12日 1年ぶりに手取屋征夫さん夫妻(石川県白山市)と、弟の八木夫妻が来邑されました。

8月15日 午後2時から大倭神宮にて大倭教立教開宣祭及び月次祭が行われました。

8月20日 午前8時から大倭墓地の大掃除、9時半から紫陽花邑の掃除祓が行われました。この日も晴れ渡って猛暑の中を頑張ったという感じです。

8月22日 石垣雅設さん(静岡

県袋井市)、磯部将紀さんと夏休み中の子供さん3人(同磐田市)が大倭会館に1泊。次の日は月次祭に参加されました。

8月23日 大倭大本宮月次祭。9月5日 午前11時半から東方の碑前でご挨拶。12時から奥津斎庭で祖霊祭が行われる間、拜殿では平成4年8月13日の東光大祭の法話ビデオが上映されました(平成21年8月号『おおよまと』に「宗教の根本―自分個人の心の修養」、9月号に「幸せになる近道―霊界人と交流する」として掲載分)。

この後教長さんが拜殿にいら

れ、東光大祭の祭典が行われて滞りなく午後2時過ぎ頃、皆さんに経木が渡されました。ウィークデイでしたが、徐々に参拝者で拜殿があふれるほどになりました。

9月6日 大倭神宮月次祭。祭典後教長さんが、改修工作が始まる故中村昇次さんの家のお清めをされました。「昇ちゃんハウス」と呼び始めています。

9月10日 祓会。福井の齋藤正宏さんは久しぶりに、広島県大崎上島町の中本好子さんはこのところ続けての参加です。幼い頃の戦争の記憶から最近の「A I」の話まで話題は豊富でした。大倭安宿死では(菅原園)

集中しました。9月1日 食堂で9月生まれの誕生会。皆でお祝いしました。(長曾根寮)

8月17日(デイサービス)フロアに提灯を吊るし夏祭り。射的・輪投げ・ヨーヨー釣りに、たこ焼きとかき氷も。

8月20日(特養)2階フロアを夏祭りムードに。輪投げや射的・ボーリング等が大好評。(茂毛路園)

8月25日 第1回夕涼み会を実施。例年の流しそうめんに新しくアトラクションや露店を加えて、1階共用部全体にお祭りの雰囲気を感じました。(八重垣園)

8月10日 アルコールはだめだ梅酒の飲めない方に梅ジュースで作ったゼリーを召し上がって頂きました。

## あんない

\*月次祭(大倭神宮) 10月6日(金) 午後2時より大倭神宮にて。

\*大倭会主催第585回祓会 10月8日(日) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

\*月次祭(大倭神宮) 10月15日(日) 午後2時より大倭神宮にて。

\*月次祭(大倭大本宮) 10月23日(月) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

### 第336回大倭会文化行事

## 秋の旅行のご案内 — 平和を祈る場所、広島へ —

**日時** 平成29年10月29日(日)・30日(月)

広島駅新幹線改札口(2階)に12時15分集合

**行程** 貸切バスにて各所訪問

(一日目) 平和公園 平和記念資料館 シュモアハウス  
(江波山気象館などの車中説明)

(二日目) 厳島神社 尾道「千光寺公園」  
福山駅にて解散にします。

**宿泊** 安芸グランドホテル(宮島口)

**費用** 3.5万円

**申込** 10月2日(月)までに世話人のところへ

**世話人** 湯浅芳郎 携帯 090-6987-5847  
溝口富士男 携帯 080-3101-1639

8月23日 中庭で流し素麺。  
8月29日 奈良佐保短期大学から12日間、2名の実習生が来て皆、楽しそうでした。(須加宮寮)  
8月22日 音楽療法で、歌や楽器を楽しみました。  
8月25日 書道クラブ。真剣に

**こ** 前に昇ちゃんの居た、東京都ろうあ者更生寮の職員だった川上賢一さん H29・7・1 『おおよまと』届きました。私は昇ちゃんの担当ではなかったとしても、一体昇ちゃんの何を知っていたのか。何度も読み返し、そう思いました。昇ちゃんについて、皆さんの文章を読ませてもらって、また以前から(岸田) 哲さんの電話などで感じていたことですが、大倭の環境の中で、昇ちゃんは全てでは勿論なかったでしょうが、かなり思い通りの生活が出来たのではないのでしょうか。幸せだった。器量ある人々の中で昇ちゃんも頑張り、器量ある人々も頑張った。そんな気が私にはします。(略) 雨ニモマケズ、風ニモマケズ、安倍ニモ、トランプニモマケヌ丈夫ナ心ト精神ヲモチ……と、今は思いながら生きています。  
▼現在は東京聴覚障害者支援センターになり、センター長の高橋秀志さん H29・7・5 この度は、中村昇次さんの追悼特集をありがとうございました。(略) 昇次さんは終生大倭の皆様はじめる多くの方々の温かな目に見守られ過ぎていたのだろうなと想像され、胸に伝わるものがあります。感謝申し上げます。